

近似的解決と真の解決

私は、実は、機械があまり好きではない。車や電車に乗るのも嫌で、高校も大学も自転車で通える範囲から選んだ。

様々存在する機械の中でも、人工知能的な機能が搭載された家電、特に、「喋る家電」が嫌いである。そういうと、「人工知能プロジェクト（「ロボットは東大に入れるか」）のリーダーなのに？」と怪訝な顔をされる。そういう我が家には当然のことながら電子レンジは、ない。電子レンジで温めると旨い酒は台無しになり、餅は正体をなくす。やはり、面倒でも酒は湯煎、餅は焼き網の方がおいしい。

「でも、便利なのよ。電子レンジの言うとおりにすればたいいの料理はできちゃうんだから」と言う友人もいる。最近の電子レンジには数十種類のメニューが組み込まれていて、レンジの命令通りにすれば、ハンバーグでも、エビフライでもできてしまうのだという。もちろん、電子レンジに揚げ物などできないから、それは擬似的な物に過ぎないが、「結構イケる」のだという。

さて、問題はここである。

近似的解決が提供されたとき、最初は多くが真の問題解決との差に気づく。「やっぱりもち網で焼いた餅のほうが旨い」と感じる。だが、真の問題解決（餅を網で焼く）の手間を考えると、往々にして横着になり、近似的な問題解決（餅をチンする）を受け入れる。だが、彼女（彼）はこう考える。自分は真の解決と近似的解決の差を明瞭に認識している、ただ今回は費用対効果を考えて合理的に選択しただけだ、必要なときにはもちろん真の解決を選ぶことができる、と。

哲学者マーシャル・マクルーハンが『メディアの法則』において、それは甚だしい思い違いだと喝破した。人は自ら生み出す道具によって、形成されるのであり、その逆ではない。私たちはそれらの道具を利用することによって、それを補完するような新しい存在に不可避免的に、なるのだ。ソクラテスもそのことを見抜いていた。人類史上最大の発明である文字を用いることを、彼は拒んだ。そのことを惜しむ弟子プラトンはソクラテスの思想を文字にして残した。プラトンの選択は合理的ではあったかもしれない。だが、そのことによって失われたものの価値を私たちは判断することができない。なぜなら、私たちは皆、プラトン以降の文化で育ってきており、文字のない世界の差異を感じる能力を失っているからである。私たちは今後、電子レンジによって、スマートフォンによって、Watsonによって、Siriによって、形成されていくのだろう。

だから、私は、インタビューで「人工知能は、人間のように情緒を感じるようになりますか？」と尋ねられたとき、こう答えるようにしている。人工知能が私たちの生活に入り込むとき、私たちから情緒を感じる能力が失われるから、それほど差を感じなくなるでしょう、と。記者には意味がわからならしく、その答えが記事になったことは、今まで一度もないが。



新井 紀子

国立情報学研究所教授

東京都出身。一橋大学法学部およびイリノイ大学卒業、イリノイ大学大学院数学科修了。博士（理学）。

専門は数理論理学（証明論）・人工知能。広島市立大学助手、フィールズ研究所・プリンストン高等研究所客員研究員等を経て2006年より国立情報学研究所教授、2008年より同社会共有知研究センター長。2010年 科学技術分野の文部科学大臣表彰。2011年より人工知能プロジェクト「ロボットは東大に入れるか」プロジェクトディレクターを務める。

主著に『数学は言葉』（東京図書）、『コンピュータが仕事を奪う』（日本経済新聞出版社）、『ロボットは東大に入れるか』（イーストプレス）など。